三医会
関西支部会 会報
KANSAI

三医会関西支部会事務局
〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町2-20-21
医療法人 杉本眼科
杉本 浩一
TEL 06-6624-1985
FAX 06-6624-6291

ご挨拶

杉本　浩一（昭和42年卒業、大阪市）

会員の皆様方にはご健勝にお過ごしのことと存じますが今年の夏はとても暑かったです。8月中旬には気温40.9℃を言う約40年振りの記録が打ち破られ特に都会ではヒートアイランド現象で地球温暖化削減に協力しなければと思いつつ家にいてもクーラを付けっぱなしでした。しかしこの夏に感動を与えてくれたことも幾つかありました。第89回高校野球大会（於甲子園球場）の決勝戦で佐賀北高校の逆転満塁ホームランや２００７年世界陸上競技大会（於大阪市）の女子マラソンで土佐選手の39kmからの驚異的な粘りなど人間の神がかり的な一面にただただ感服しました。一方医療界に目を転じると「崩壊する日本の医療」とか「医療崩壊」と言う言葉が頻繁に目に付くようになりました。特定の診療科（産婦人科、小児科）のなり手の敬遠、特にリスクの高い産科医が減少し医師不足がますます深刻となっています。現在の医師不足問題は医師の絶対数の不足のみならず都市部への偏在や新医師臨床研修制度の実施、医師の過重労働、厳しい医療費抑制政策、女性医師の増加に伴い就業率の低下などが複雑に絡みあって地域の医療にも深刻な影響をもたらして悪循環が生じています。三重県の医療状況も危機的な状態で今までは大学病院を中心として医師供給体制が円滑に実施されていましたが若手医師が大都市の病院への就職を希望し母校への残留が極めて少数となっています。母校の今後の研修システムと研修環境の整備への熱意とたゆまぬ努力に期待したいと思います。このような状況下で国の施策の一環として医学部定員の5名増と三重県内の地方枠20名が承認されて三重県内の医師不足も何とか確保されようとしています。6月18日（日）には今年度の三医会総会が津市に於いて開催され豊田学長から国立大学の交付金がしだいに削減されて苦しい財政状況が報告され三医会会員の支援を要請されました。深刻なことばかりではなく内田附属病院長からは昭和48年に建設された病院がこのたび新しく立て替えられ時代に即応した病院となると言う朗報が報告されました。支部活動の面では今年の三医会関西支部総会は2月18日（日）大阪地区の主務で約40名の会員が出席して盛大に開催されました。いわゆる「夏の会」も三重大学の学生さんも参加して6月2日（土）に無事行われました。平成20年の三医会関西支部総会は兵庫県の主務で開催されます。一人でも多くの会員の方々のご出席をお願いします。今後とも三医会本部と緊密な連携を取りながら支部活動を推進して行く所存ですので先生方のご協力を宜しくお願いします。

関西医大のリハビリテーション科教授に就任して

関西医大教授 リハビリテーション科　吉田　清和（昭和47年度卒業）

平成18年6月1日私はそれまで住んでいた米国イリノイ州シカゴ市から大阪府枚方市に住む事になりました。関西医大のリハ科教授に選ばれたからです。簡単に私のアメリカでの21年間の略歴を申しあげます。

私は１９８５年渡米しました。最初の地はカリフォルニア州サンフランシスコ市でした。はじめの4年間は研究者としてＵＣＳＦ（カリフォルニア大学サンフランシスコ校）整形外科教育病院であるシュライナーズ小児病院でバイオメカの研究をしておりました。その間米国で臨床をするのに必要な4つのテストに合格するための勉強をしました。英語、基礎医学、臨床医学、そしてFlexという臨床問題解決のテストです。一番難しかったのは基礎医学でした。特に免疫学で、私が学生時代に勉強した内容と比べ遥かに進歩しており、内容だけでなくその量も膨大なものでした。しかし偶然にもその時三人のノーベル賞受賞者から直接講義をＵＣＳＦで聞くことができました。Bishop, Vamus そして利根川の三人です。

無事すべての試験に合格し、まず最初のインターンをＵＣＳＦのすぐ隣のSt. Mary 病院ではじめました。私は内科1年を選びました。整形外科をすでに日本の三重大学で5年しており将来リハビリを専門にしたいと思っておりました。三日に一度の一睡もできない夜の当直がありました。平均10人を当直時入院させました。一人1時間はかかりましたし、常に患者の自宅からの電話、救急外来からの呼び出しがあり、人生で一番肉体的につらい経験でした。入院手続は入院時病名、現病歴、既往歴、入院時所見、検査、診断、鑑別診断、治療方針とすべて教科書通りにしました。手抜きは一切無です。入院時は手書きですが、退院時まとめはすべて口述によるタイプ印刷です。しかもこれを数日以内にしないと給料が支払われません。睡眠と食事する時間がなかったです。平均入院期間が5日間ですから走るような毎日でした。

救急も2ヶ月ローテーションがあり、ＩＣＵ、ＣＣＵも1ヶ月ずつありました。おかげで大変多くの症例を受け持ちました。また毎朝、8～9時には前の晩自分たちが入院させた症例を指導医が丁寧にチェックし、指導してくれました。さらに毎日12時から1時までの昼食時間に内科のいろいろなテーマについて講義をしてくれました。ですから猛烈に忙しかったが不満は全くなく充実した毎日でした。ところでサンフランシスコはエイズの患者が大変多くいたところで、採血・診察など特に意識障害の患者の腰椎穿針は大変でした。

ついで東海岸のバージニア州に移り、三代目大統領ジェファーソンが自ら作ったバージニア大学（創立1819年）でリハ科のレジデントを3年しました。大変国際的な大学でヨーロッパからの留学生が多く、同じレジデント仲間は米国人以外にフランス、スペインなど国際色豊かでした。リハ入院の平均期間は10日間で常に10人ほどの患者をもち、毎日外来もしておりました。当直は週一回でした。ですから自分のポケットには常に小型のテープレコーダーを持ち、暇さえあれば退院時サマリーを口述しておりましたし、食べ物はねずみのようにいつもポケットにいれ、カロリー補給をしていました。レジデント仲間では脱落していく人たちが常にいました。私は幸いチーフレジデントに選ばれ、今も自分の履歴書

にはそのことを書いています。

　無事レジデントを終了後最初の教官の仕事は中西部シカゴ市にあるノースウェスターン大学のリハ科であるシカゴ・リハ研究所（Rehabilitation Institute of Chicago）でした。全米第一と20年間もニューズウィーク誌で評価されてきた大学病院です。リハ科だけで18階建てのビルをミシガン湖畔に立て、シャガール自らが寄贈した絵を玄関にもつ160床の病院です。医師の教官だけて50人。レジデントも40人、ＰＴが70人、ＯＴが40人、ＳＴが20人等々です。米国の教育病院におけるスタッフ数は日本では想像できない程多い数です。ちなみにハーヴァード大学は大学全体で医師の教官は8000人、レジデントは8000人、リハだけでは教官60人、レジデント60人です。ＲＩＣの患者は世界中から来ており、私は8階の病棟30床を受け持ちました。日本人の患者、アラブの皇太子の患者等です。平均入院期間はやはり7ないし10日間です。朝5時起床、6時出勤、7時病棟回診、9時患者は訓練開始、したがって9時回診を終わり、病歴書き、検査オーダー、10ないし11時から他科からのコンサルテーション患者の往診、そして午後は外来という毎日です。またノースウェスターン大学の一部でしたが入院患者のわずか60％だけがノースウェスターンからで、他はシカゴ大学他の大学病院患者を入院させていました。ですから私は毎週一回、シカゴ大学でリハ回診をし、適応があれば、自分の病棟にシカゴ大学から入院させていました。もちろんシカゴ大学は私にシカゴ大学での診療行為をする許可を与えてくれておりました。ＲＩＣでは年間約100個の生涯教育プログラムを実施しており、もちろん私はその講師に無料で借り出されておりました。レジデントは無料でこれらの講義に参加できます。米国の教育病院での教育の時間数と質は、今後日本は大いに見習う必要があります。

　次に勤務した大学はウィスコンシン医科大学で、昨年関西医大にくるまで勤めておりました。ＶＡ病院、小児病院、フレーダート病院の3病院で構成されており私はいずれでも勤務しておりました。小児病院では脳性小児麻痺、二分脊椎などの装具、車椅子、シーティング・クリニック、フレーダートでは脊損、骨関節外来、そしてＶＡではペインクリニック、関節炎クリニック、障害評価クリニックなどです。多くのレジデントを採用、評価、教育しました。もちろん学生、レジデントからも逆に私は評価されました。2006年には最優秀教師に選ばれ、プラークを贈られ、自分のオフィスの壁に飾っています。

　今後の目標は一人でも多くのリハ専門医を育てることです。そのためには日本にも急性期リハを立ち上げたいと思っていますし、また教育の充実に貢献したいと思っています。

　今後ともどうかよろしくお願いします。

ケンブリッジで学んだこと

大阪大学大学院医学系研究科核医学講座
臨床医工学融合教育センター　特任講師（常勤）
高沢　正志（平成8年卒業）

　大阪大学大学院医学系研究科博士課程を修了後、博士研究員としてケンブリッジ大学医学部アデンブルックス病院脳卒中センターで三年間留学する機会をいただいた。私の研究テーマは脳循環代謝学であり、高性能陽電子放出断層シンチグラフィ（ＰＥＴ）を用い、脳虚血病態を研究するためである。

　ケンブリッジは、ロンドン・キングスクロス駅から北東へ、長閑な田園風景を五十分である。街には壁で囲まれた大学の敷地はなく、築数百年の煉瓦づくりの大学関連の建物がいたるところに並ぶ、古き良き英国田舎街である。菊池大麓氏・白州次郎氏から藤原正彦氏に代表される偉人が学んだ学問の聖地である。

　研究室は Jean-Claude Baron 教授に講師二名、研究員と大学院生数名で構成され、ＰＥＴ・ＭＲＩを使った臨床脳卒中診断学が主な研究テーマである。病棟回診や研修医の指導は主に講師が担当している。病院内では白衣姿は研修医だけで、講師以上はスーツに聴診器である。ジョンブル気質は相手に不足なく、何事においても本質を掴もうとする英国スタイルは、大いに学ぶところであった。

　英国と言えば、ビールである。仕事が終われば、パブに行く。ワトソン・クリック先生がＤＮＡ二重螺旋を思いついたパブで、両先生が座っていた椅子でギネス片手に友人と大いに議論したが、良い研究アイディアは未だに浮かんでこない。二十世紀の大発見はギネスビールのおかげではないことが明らかとなったのも、今回の研究成果のひとつである。

　私が専門とする画像診断学は、空間分解能1㎜以下の高性能ＰＥＴが開発されつつあり、生体内分子機能を in vivo 測定する新たな時代を迎えようとしている。もうしばらく、このＰＥＴ分子イメージング新潮流に身を任せつつも、本質を掴みたいと思う。

　研修医時代よりお世話になっている石藏文信先生、三医会関西支部としてサポートしてくださっている杉本浩一先生に御礼申し上げます。

ケンブリッジで一番美しい風景
「ケム川からのキングスカレッジ」（筆者撮影）

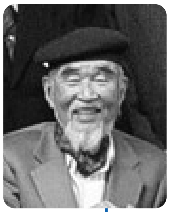
クロスカントリースキーの楽しみ

松原　隆志（昭和54年度卒業）

　今日は趣味の話です。私の参加しているクロスカントリースキー（以下クロカン）はアップダウンはあるもののほぼ平地で行われています。クローズドサーキットです。これを競技として始めたのは冬期国体に出場する時でした。平成7年の福島国体でちょうど阪神大震災直後で「神戸から来ました」というと「よくぞ参加した」と皆に驚いたり感心されたものでした。初めての参加は準備不足もあって最下位でしたが、その後続けて参加しているうちに冬期国体や他の地方大会の成績はまだ下に何人もいる状況になってこれからはさらにもっと上位を目指したいと思っています。スキーの装備は板、ストック、靴などは超一流品でオリンピック選手なみの品揃えですがプレイヤーとしては果たして何流なのでしょうか…。体力のレベルは陸上走および実際の雪上走（スキー）で500ｍを2分30秒以内が選手の推薦基準で若者なら楽勝のタイムですが中年にはきついです。日頃の体力の維持が大切でこのことが楽しみでもあります。目標があればこれを越して行きたいといつも考えています。スキーの練習ですがシーズンオフは基礎体力やランニング、ローラースキーを根気よく行い、スキー場が利用出来る頃には大会に出場するまで何回も雪の上での練習に通います。練習はやはりきつくて辛いもので息が上がってしまいます。シーズンが近づく度に頑張らねばと言う期待感を持続しながらも辛いのも事実です。しかし本番で完走したあとの清々しさを想えばやはり楽しいものです。

三医会関西支部の創設時代を振り返って

杉山　茂男（昭和24年度卒業）



　なにしろ約50年も経過した時代を振り返ってみようと言うことですのであまり記憶もさだかではありませんがこの際関西支部の記録の一つにお役に立てばと思って筆をとってみました。記憶違いもあるかもしれませんがその点はお許し下さい。

　三医会そのものは当初「阿漕会」と称して昭和26年に発足しました。その中に大阪支部としての記載はありますが何ら活動は行っていませんでした。当時私は大阪市大第二外科に所属しており医局の仕事の方が忙しくて三重県立医大も昭和26年に医専3期が卒業したばかりで関西地区に何人位の卒業生が居られるかは不明確でした。二期卒の井上康夫先生から二期卒の大阪在住の同期生は毎年2月11日に同窓会を開催することに決定しましたとの便りを頂いてそれなら一期生も一緒にやりましょうと言う具合にうまく便乗させて貰って一年に一度会合を開催する様になりました。このようなあんばいでほそぼそとは言え三医会関西支部の始まりとなりました。大阪在住者だけでは人数的に少ないので兵庫県の細川昌義先生（Ｓ24卒、一期生）に声をかけて関西一円の三医会の同窓生の輪を広げるように努めました。昭和40年代になると近畿2府4県の会員が2月11日の建国記念日に各府県が輪番となって主務を受け持って下さって次第に

盛大な会を開催出来るようになって来ました。三医会の本部からは毎年世古口会長が出席して下さって母校の様子を報告して頂きました。昭和47年念願の国立移管がなされ全国有数の難関校となってこれからも益々発展して行くでしょう。三医会関西支部も約500人の会員が在籍するようになった現在お世話して頂く役員の方々は何かとご苦労様ですが今後の活発な同窓会活動が行われることを祈っています。

平成19年三医会関西支部総会

小川 佳成
（昭和63年度卒業）

今年の支部総会は大阪が主幹となり2月18日（日）に近鉄上本町駅前の中華料理店〃百楽〃にて開催しました。来賓として三医会本部から川原田会長、教授会を代表して片山先生にご多忙の中をお越し頂きました。参加者は40名で、総会に引き続き、定番の回るテーブルを囲んでの懇親会となりました。杉山先生の乾杯の発声の後、川原田、片山両先生より同窓会や医学部の現状と将来展望についてお話し頂き、その後は料理とお酒を楽しみつつ、参加者1人1人が自己紹介や現状報告を行い、話を弾ませながら、あっという間に3時間が過ぎました。参加者は昭和24年卒の大先輩から平成18年卒の研修医まで、干支が一巡しそうなほどの広い年齢層に亘っていました。これだけの広い年齢層の人々が一堂に会して会話を楽しむ機会は、人生において滅多と無く、結婚披露宴ぐらいでしょうか。大先輩の含蓄のある一言、若手の活気に満ちた話、希望に燃える研修医の姿を見聞きだすだけでも一万円（参加費）を握って参加する価値があったと思われます。

〈気がかりな点〉

関西支部の会員数は500名近くに達するものの総会の参加者は例年30〜40名で、写真をご覧頂くと解るように、参加者は長老と大御所と若手となっており、中堅を担う先生方の少ないことが残念でもあります。ところで出席の返事が40枚、欠席の返事が120〜130枚帰ってきただけで、残りの300枚近いハガキは何処へ行ったのでしょう。参加者の減少は、どのような同窓会でも抱える問題であり、時代の趨勢からは、今後の同窓会の存在意義を問い直す時期に来ているのかもしれません。多くの参加者で溢れるような楽しく活気ある活動をするためにはどうすべきなのでしょうか。良いアイデアがあれば教えて頂きたいと思います。

〈支部役員と今後の活動〉

支部役員は大先輩に支えて頂いておりますが、長らく総務・会計として事務局を支えてくださった石蔵文信、久美先生とバトンタッチして、総務の宇野先生（H5年卒）、会計の猪尾先生（H7年卒）、譜久山先生（H10年卒）、厚生の西原先生（H元年卒）、勤務医代表理事の陳先生（H7年卒）等、平成世代の若手の先生方も次々と参加されるようになりました。今後の支部活動としては、先ず、夏の会（新研修医歓迎会、学生との懇話会）を6月2日に森ノ宮のアピオ大阪で予定しています。多数の方のご参加をお待ちしております。次の総会は平成19年2月17日に兵庫が主幹で、松原先生を幹事として港・神戸での開催予定です。また、師走には会報第3号の発刊を予定しております。杉本支部長の強い熱意により平成17年より創刊し、現在2色刷4ページで会員の寄稿文が満載されています。将来は6ページ、8ページと増ページを重ね、会員の交流の場となれば幸いです。最後に今回の総会・懇親会の準備と会報の発行は杉本支部長の陣頭指揮、西原先生と後輩の皆さんの尽力の賜物です。厚生係として役に立てなかったことをお詫びしつつ申し添えます。

卒後の4ヶ月を振り返って

兵庫県立西宮病院 惣田 哲次
（平成19年度卒業）

大学を卒業して、医師として初めての仕事を兵庫県立西宮病院でさせてもらってから早くも4ヶ月が経ちました。アホみたいなことばかりをしていた学生時代とはがらっと変わり医師の仕事は予想以上に大変で、責任が重く、そして国家試験の勉強だけでは何もできないということに日々痛感させられています。今回はこの4ヶ月間を振り返って思うところを書きたいと思います。

まず、西宮という土地は大阪と神戸のちょうど真ん中にあってどちらへ行くにも電車で20分足らずという、本当に立地の良いところにあります。マッチング前の病院見学ではそれなりに忙しそうで、また僕は実家が尼崎でもありいつでも実家に帰れるというぐらいの気持ちで西宮病院に決めたわけですが、まあ毎日忙しく動き回っています。この4ヶ月間は内科をずっと研修しているのですが、1日の生活を紹介すると、だいたい毎朝7時過ぎくらいには出勤してざーっと患者さんの顔を見に行きます。8時からは週2回（月・木）英語論文の抄読会があって約2ヶ月に一度は当番が回ってきます。内容は英語論文を他の先生たちに紹介しては、質問攻めに合うというもので、逆に聞いてる側になれば一度は質問しろというプレッシャーをかけられます。火曜は内科部長のカルテ回診があって、自分の持っている症例をプレゼンさせられます。新患が当たっていれば英語でプレゼンさせられます。This patient came to our hospital for abdominal pain yesterday…と簡単なものなのですが、いきなりしろといえばなかなか出てこないもので四苦八苦しています。9時からは曜日によって違いますが、病棟当番といって点滴のルートをひたすら取るという日もあれば、エコーなどをさせてもらったり、内視鏡を見に行ったりもしています。その後にまだ出していない患者さんの指示を出しにいくのですが、いつも看護士さんに「指示まだですか!?」とプレッシャーをかけられています。昼からも色々で、患者の様子を見に行ったり、心カテを見に行く日もあれば、内視鏡治療（EISやEVL、ポリペク、EMRなど）を見に行ったりしています。患者数はだいたい12、3人持たしてもらっていて、消化管、肝臓、血液、神経、循環器と幅広く経験させてもらっています。癌患者も多く、学ばされることが多いです。退院された患者さんがまた入院してきたときなんかはドキッとします。当病院は肝臓疾患の患者さんも多く、経過の長い方が多いのでそういったことはよくあるそうです。先日は内科部長の勧めで関西肝臓同好会というところで症例発表をさせていただいたのですが、ビシバシと肝臓好きの先生方から質問攻めに合いました。また別の日は気胸患者が手術適応だということで、当病院には胸部外科がないために兵庫医大に転院となったのですが、持続酸素投与が必要で救急車で搬送する必要があり、一緒に兵庫医大まで救急車で同行させてもらったりもしました。当直は月に約4回あり、初診をさせてもらえます。初めは何もわからず患者が運ばれてきたときにはすぐに上の先生に聞きに行っていたのですが、最近はとりあえず身体所見をとって、検査データを揃えるくらいは出来るようになりました。

毎日が本当に忙しく、勉強する時間が足りなくて1日30時間ぐらい欲しいと思ってしまうような日々ですが、この4ヶ月間は本当にあっという間に過ぎてしまって、医師として少しも成長していない自分に葛藤している毎日です。今は歯を食いしばってただひたすら頑張るしかないと思いながら毎日を過ごしています。10年後には成長している自分の姿を想像しながらこれからも頑張っていけたらと思っております。

平成20年の三医会関西支部会総会・懇親会のご案内

●兵庫県が担当します。皆様方のご出席をお願いします。

開催日時 2月17日（日） 午後3時〜6時

開催場所 ポートピアホテル
神戸市中央区港島中町6-10-1
TEL 078-302-1111

三医会関西支部役職者一覧表（敬称略）

◆支部長	杉本 浩一（S42年）		◆監査役	庄村 東洋（S36年）	
◆副支部長（各府県1名）				安藤 仁郎（S38年）	
大阪府	蔭山 充（S52年）		◆勤務医会代表の理事		
京都府	石田 晟（S39年）			布谷 隆明（S49年）	
兵庫県	松原 隆（S54年）			岡田 行功（S49年）	
奈良県	西川 勝仁（S53年）			林田 孝平（S50年）	
和歌山県	中村 光作（S53年）			山形 高志（S51年）	
滋賀県	青木 建亮（S39年）			斉藤 徹（S52年）	
◆専務理事				陳 慶祥（H7年）	
総務	宇野 敦彦（H5年）		◆開業医会代表の理事		
	高沢 正志（H8年）			細野 進（S51年）	
会計	猪尾 芳弘（H7年）			倉田 順弘（S54年）	
	譜久山 仁（H10年）			山下 宣繁（S53年）	
厚生	小川 佳成（S63年）		◆名誉会長	杉山 茂男（S24年）	
	西原 承浩（H元年）			高橋 章三（S33年）	